『國民新報』1939年6月18日

勤労の本意[[1]](#footnote-1)

　で、のがのなどしてるのをよくける[。]のみにはのが、一、のにいてをすることゝなつてるさうで、これはにぶべきことである。かかるのはもにらるべきではない。萬悉くにはらなければならない。そしてはに一のでらせてはならぬ。ののをのとしてをぶをるべきである。に『はせず』てふをば、のにいてこそすべきである。くもらにたせうて、のあらせられたとはる。はの一としてのをした。こそ――こそはのもい、一のめなることをこのしかとすべきである。

　しのなるものは、てにりいものである。『おれはかるしきにすべきではない』とふな（それはたであり、さもしきりであるが）がのにはれるなことがあつては、つてのをすることゝなる。ののきにとつたなさをたのはたのかにないことである。はなるであつてせびらかせではない。にのは、そのよりも、ろをびをしむとふがなるべきであるから、なはのさへもないものである。

　、にはにいてのとなり、のにならなければである。やでをしたものが、にればなつちやん、ちやんのにるでは、のをなさない。にのにきるなら、のにいてこそ、そのをすべきである。

　『のことはでせよ』とはにへられるであるが、のならのことをでしたゞけではりない。の、、などはのこと、のためのをいてはでることならでもなすべきである。

　はであり、はしたである。のは、よりものをからされてる。のはしくのにきなければならない。

1. 単行本『同胞に寄す』に収録されていない。 [↑](#footnote-ref-1)